東灘歴史の足跡をたどる 住吉川編

繁栄と文化をもたらした、川の恵み

私たちのまち・東灘は、どんな歴史を歩んできたのでしょうか。今回は「住吉川」をテーマに、住吉歴史資料館のお二人をお招きして、豊かな歴史のあれこれをインタビューしました。六甲の山並みから魚崎まで流れる住吉川に、どんな歴史が秘められているのでしょうか。先人の記憶に思いを馳せ、しばし歴史の旅へと出発しましょう。

記憶と記録を未来へ 住吉歴史資料館の活動

―今日はお越しいただき、ありがとうございます。伝統と文化の豊かなまち・東灘の知られざる歴史を、「住吉川」をテーマにお伺いする会を企画しました。どうぞよろしくお願いします。まずは、住吉歴史資料館について、ご紹介いただけますか？

内田　神戸大学の先生と共同で、地元の聞き取りや資料の調査を行い、記憶が風化する前に次世代へ継承しようと、２００１年に住吉学園によって設立されました。資料館には、「兎原（うはら）住吉、昔を未来へ」というスローガンがあります。兎原というのは、この辺りの地名です。

住吉歴史資料館 事業推進委員
内田 雅夫さん

ざっと住吉の歴史を説明しますと、縄文時代から人が住み、古墳や遺跡もたくさん発掘されています。江戸時代には、幕府の天領になり、商業や農業が発展していきます。日本に鉄道が開業して間もない、１８７４（明治７）年に住吉駅ができて以降は、住宅街として発展してきました。お子さんや新しい住民の方に、地元の良さを伝え、愛着をもって住み続けてほしいと願っています。

また、阪神・淡路大震災の時には、住吉独特の復興の形がありました。専門家の先生から、ぜひ記録に残すべきだと勧められて、『阪神・淡路大震災資料集Ⅰ～Ⅲ住吉の記憶』という資料集にまとめました。「災害」も我々の活動の大きなテーマの一つであり、水害や震災の時に、地元の人がどう行動したかという記録は、きっと将来役に立つだろうと思います。

だんじりまつりに見る 荘園・山路庄の名残

―山路庄（やまじのしょう）というのは、住吉の古い地名なのでしょうか？

内田　はい。一番わかりやすいのは、だんじりまつりです。本山、野寄、岡本、西岡本、西青木地区などのだんじりが、なぜ住吉神社へ集まるのか？ 考えてみると、不思議ですよね。実は住吉神社は、「山路庄」という中世からの大きな荘園の総氏神だったので、山路庄の村（旧七ヶ村：住吉村、野寄村、岡本村、田中村、横屋村、魚崎村、西青木村）が、だんじりを出してきて、宮入りをしていたという歴史があるからなのです。

江戸時代になると、山路庄の村も、例えば尼崎藩の領地になったり、幕府直轄の天領になったりして分かれます。ですが、日々の暮らしの中に今も息づいているという区分けです。

住吉歴史資料館 事業推進委員
前田 康三さん

―地区の真ん中を流れる住吉川について、教えてください。

内田　住吉川は、古くは慈明寺川（じみょうじがわ）と呼ばれていた時期もあります。白鶴美術館の近くに、慈明寺という大きなお寺があったことにちなんでいます。六甲山の急流で、水量が豊富なので、農業用水として活用されてきました。この川の水を基に暮らしを営んでいたのが、山路庄の七つの村々ということです。

前田　住吉川は、もっと西を流れていたという言い伝えもあります。川の流れはそう簡単には変わりませんが、住吉宮町遺跡や郡家遺跡から御影石がゴロゴロ出てくるのが、そこに水が流れていたという証拠です。白鶴美術館付近の尾根からの流れであることは変わらず、徐々に東へ寄って行ったんでしょうね。

度々繰り返された 水害との戦い

内田　山路庄は、住吉川を中心に成立して発展した村々です。ただ、住吉川は、ほぼ毎年必ず大雨で溢れていて、最後のダメ押しが、１９３８（昭和13）年の阪神大水害でした。当時の住吉村には、日本の政治経済を動かす人たちが屋敷を構えていたので、国を動かして治水工事に取りかかりました。その流れで、国営の六甲砂防事務所が住吉東町にあるんですよ。

資料館のお茶会に来てくれた子どもたちには、いつも水害の話をします。昔は、中学生ぐらいになったら、土嚢（どのう）を積んで、各戸分担の堤防を守る役割がありました。そんな話をすると、みんな驚いていますね。

山路庄の話に戻して、住吉周辺の荘園の名前もご紹介しましょう。隣の御影は郡家庄（ぐんげのしょう）、東側は本庄（ほんじょう）、本庄の隣は芦屋庄（あしやのしょう）。西へ行って、郡家庄の隣が得井・時枝庄（とくい・ときえだのしょう）という荘園でした。

それぞれ領主がいて、山路庄は、藤原氏。藤原氏の氏神である、奈良の春日大社の荘園だったこともあります。だから、この辺では春日明神をよく祀（まつ）っているんです。

石谷清昌（いしがやきよまさ）に見出され、住吉村は幕府の天領に

―「住吉川の水車小屋跡」が、神戸歴史遺産に認定されましたね。

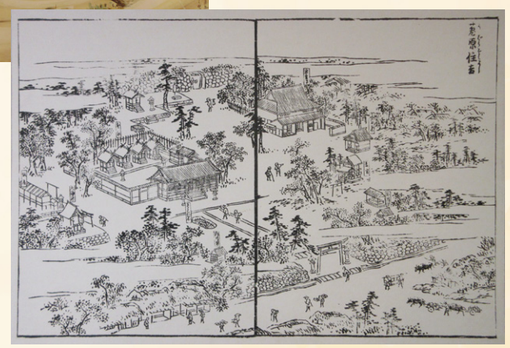
前田　皆さんのご協力のおかげです。申請者は、山田クラブといって、元は住吉村青年団山田分団です。神戸市から委託を受けて、登山道整備を実施してもう60年以上になります。２０１５年から、梅の植樹を行っていまして、若い人たちが一生懸命やっています。きれいな花を毎年咲かせますよ。

1938（昭和13）年の阪神大水害で、住吉小学校で避難する児童たち

内田　住吉川の流域に水車が掛かっていたなんて、もう誰も知りません。何代か前の身内が水車業をしていても、忘れられているんです。神戸歴史遺産に認定されたことは、後世に伝えていくための、いいきっかけになります。

―水車小屋跡のある八軒場（はちりょうば）地点より上流には、砂防ダムがたくさんありますよね。

前田　後に神戸市長になる原口忠次郎さんが、内務省時代に「五助ダム」をはじめ、多くの砂防ダムを設計・建設しました。そのイメージが、「山、海へ行く」に繋がっているのかもしれません。その後も、全国の水害を防ぐ、テストケースとしていろんな砂防ダムが、六甲砂防事務所によってつくられました。今も、砂防に関わる国土交通省の新入職員の研修場所になっているほど、ここは日本の砂防の要なんです。



1804（文化元）年『播州名所巡覧図絵』に描かれた、本住吉神社。神社前の街道は江戸時代の西国街道で、いまの国道2号線である

東灘 歴史の足跡をたどる

住吉川編

水車の話で、忘れてはいけないのが、石谷清昌（いしがやきよまさ）という人です。徳川吉宗の側近だった、紀州出身の人物で、幕府の勘定奉行や長崎奉行などの重役を務めました。彼が、当時尼崎藩だった住吉村を含む灘地方の豊かさを見出し、1769（明和6）年に幕府の天領にするように老中に献策したと言われています。

人口120万人を抱える江戸は消費経済で、様々な物が大阪から江戸へ供給されていました。特に油は、大阪が供給源で、価格の高騰を抑える必要がありました。後に幕府は、天領にした住吉村などで、水車を自由に作ることを許可し、油の大量生産を可能にしました。そうすることで、油の供給を安定させることに成功しました。

水車なくしては語れない、灘の酒造り

前田　灘の酒造業が繁栄した鍵は、水車にあります。水車が解禁された10年後に、水車を使っての精米が始まり、酒の大量生産が可能になりました。足踏み精米だった他の酒どころに比べて、水車の精米能力は約10倍。また、精米度合いが85～90％まで上がり、お酒の透明度が増しました。江戸では、この透明でキリッとした味わいの「灘の男酒」が非常に好まれました。

内田　幕末頃になると、新酒を江戸へ運ぶ速さを競う、新酒番船（しんしゅばんふね）というレースが始まりました。新酒を積み込んだ、酒造会社の樽廻船（たるかいせん）は、西宮沖から一斉にスタートします。通常12～14日ぐらいかかるところ、3日で江戸へ着いたという記録もあります。これは、一つのデモンストレーション（販促活動）だったんですね。灘は、大変商売上手でした。しかも、質の良い精米が大量生産できて、六甲南の気候と水、杜氏（とうじ）の腕、出荷に便利な浜辺の立地。すべてが揃っていたからこそ、他の産地を凌駕して、灘の酒が江戸の町を席巻できたのです。

また、灘の酒造家が素晴らしいのは、莫大な利潤を、文化振興に使ったところです。それが、東灘区の文化的な香り、他の地域とはまた異なった雰囲気を醸し出していると、私たちは考えています。

前田　話は少し変わりますが、「下（くだ）り酒」ってご存知ですか。大阪から江戸へ出荷することを「下る」と言ったのですが、悪いお酒は下れませんでした。「下らない酒」これが、「くだらない」という言葉の語源です。知っていました？これ私、ちょっと気に入っています。

江戸時代の酒造りを見ることができる白鶴酒造資料館　©一般財団法人神戸観光局

清流の道は、ダンプカーの道だった

―続いて、住吉川沿いに整備されている「清流の道」の歴史を教えてください。

内田　清流の道、いいですよね。車が通らないし、皆さん本当に楽しんでおられますよね。元は、原口市長の時代に、渦が森を削って造成して出た土砂を運ぶため、川の中に道を通そうということで、作った道でした。ダンプカーが市街地を通るとなると、信号もあるし、さまざまな規制もあるので、一気に行けるような道を新しく作ったのです。

ダンプカーは、新落合橋のところから出入りしていました。当時はまだ橋が掛かっておらず、今、その場所から川を見てもらったら、東の道は川を横切って、スロープのように上がっています。そこからダンプカーが出入りしたんです。

―その後、清流の道として、きれいに整備されたのには、どんないきさつがあったのでしょうか。

内田　おそらく、みんなが便利だからと自然に歩いていて、行政側は安全を確保するために、つまり市民と行政の意見が合致して、整備したのではないでしょうか。工事用の道を市民用に整備して開放するとは、素晴らしい発想ですね。清流の道を歩けば、すぐ図書館に行けるし、区役所へ行けるし。魚崎の方まで歩けば、散歩にちょうどいい距離ですしね。

前田　この道は、集客力がありますよ。他市から引っ越しを考えたとき、清流の道は魅力的です。四季折々の川の風景を眺めつつ、ジョギングや犬の散歩ができるなんて、最高ですよね。

地場産業を支えた水車小屋跡に今も残る、水車用の水路や石垣

阪神・淡路大震災で生きた知恵

―来年1月で阪神・淡路大震災から30年ですが、住吉には独特の復興があったとか。

内田　まずこの地域には、だんじりまつりのための地元の繋がりがありました。そして、太平洋戦争の時に、住吉中学校へ避難したことや、水路が村中に走っていることを、地元に住む人が、知識として共有していました。そんな中、1995年1月17日に阪神・淡路大震災が発生しました。

我々も、当時走り回りましたが、地元密着の行動や考え方について、神戸大学の専門の先生から「地元独特の復興手法ですよ、ぜひこれは残さないといけない」とアドバイスをいただきました。それを受けて我々で、地元の方に聞き取りをして、『阪神・淡路大震災資料集Ⅰ～Ⅲ 住吉の記憶』にまとめました。

―具体的には、どんなことがあったのでしょうか。

内田　2,000人が避難した神戸市立住吉中学校は、断水していて、近くを流れている水路へ水を汲みに行っていました。そのうち、前田さんのお父様が、「あんなところまで汲みに行かんでも、この水路を二つか三つ繋げたら、ここへ流れてくる」とおっしゃって。縦横に流れている水路に加えて、もっと細かな網の目状に、溝がつながっていたんです。実際繋げてみると、たくさんの水が流れて来ました。水洗トイレにも使えるし、避難所の清掃にも使えました。

―水路が溝で繋がっていることは、当時の方々は皆さん知っていたのでしょうか。

内田　「そうなんや、へえ～」という感じです。水汲みが長く続くと、しんどくなるから、中学校へ流した方が良いという発想は、1945（昭和20）年の空襲の時に避難したときの教訓があったからです。当時を記憶している人曰く、あのトイレの悲惨さを、再現されてはたまらない、ということで。

さらに、水路の水で、消火もしました。消防も手が回らない状況に、水路からバケツリレーをして、山田クラブの若い人5～6人で火事を消し止めたんです。

水路を繋げるという知恵や、空襲の時にトイレに困ったという記憶が、震災で多くの人を救いました。住吉川近辺の地理と歴史を知る人たちは、専門的に学んで知っているわけではなく、日常の肌に染みて知っていました。その人たちが、震災に遭い、地域のために自然に動いたということです。

―ほかにもありますか？

内田　住吉西地区での私設避難所の開設がありました。住吉駅の北側になりますが、震災で甚大な被害が出ました。すると、阿弥陀寺に避難した方が自然に集まり、応急の避難所になりました。そこで活用されたのが、だんじりまつりのノウハウでした。

各地区の会館は、だんじりまつりの担い手の食事施設になるので、たくさんの食器を持っています。そして、婦人会の人たちは、200人ぐらいの食事作りは、毎年のことで慣れている。それで、すぐに炊き出しが始まりました。

運営は、できるだけ避難民の自主性に委ねるという方針で、住吉西地区の自治会と青年団が上手にやりました。つまり、運営側でルールを決めずに、自分たちで話し合って決めてもらったのです。場所取りや食事の配給にもタッチしません。文句を出さないためのノウハウですね。

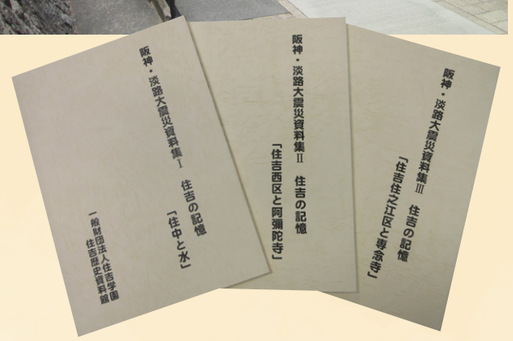
歴史の教訓というと固い話になりますが、こういったことも後世に残していきたいですね。今、女性と子どもの視点での震災をまとめた、『阪神・淡路大震災資料集Ⅳ 住吉の記憶』を作っています。

地元に受け継がれる歴史を日常に生かす

―今日は貴重なお話を、たくさんありがとうございました。

内田　今日お話した歴史の出来事や先人の知恵が、どこかで生かされたら、嬉しいです。

前田　これを読んでもらった人に、興味を持ってもらえたらいいですね。歴史を知り、そういう視点で見てみると、地元が全然違って見えると思いますよ。



上／住吉川の両岸に続く「清流の道」。市民の憩いの場として、愛されている
下／『阪神・淡路大震災資料集Ⅰ～Ⅲ 住吉の記憶』。震災復興における地域活動を記録した貴重な資料。東灘図書館にも所蔵されている

歴史を未来へ紡ぐ 地元に伝わる資料を収集

JR住吉駅から南西へすぐのところにある、本住吉神社の敷地内に建つ歴史資料館。地域に伝わる歴史資料を収蔵し、読み解いています。展示室では、貴重な資料の数々を観覧可能。年に数回行われるお茶会では、子どもたちに歴史を伝えています。

住吉歴史資料館

神戸市東灘区住吉宮町7丁目1-2 本住吉神社内
展示室は、木曜10：00～14：00のみ開館
TEL　078-201-3738（木曜のみ）
http://www.sumiyoshigakuen.com/002_work/007_rekishi/index.html

写真提供：住吉歴史資料館　　制作：神戸市 東灘区役所